美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
湊酒田まち歩き

庄内憧憬
狩野 泰一
篠笛奏者

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

9
2023 September/October
TAKE FREE
NO.79

Cradle 9 美しくなつかしい、日本をのせて。［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2023 September/October
令和5年9月1日発行（偶月奇数月発行）第14巻1号（通巻79号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15（株式会社 出羽庄内地域デザイン）電話0235(64)0888
制作／Cradle編集部　山形県酒田市新田2-59-3（マツ・コーポレーション）電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

庄内町　月山の紅葉

秋空に錦綾なす 月山登山道

荘内銀行

庄内の風 佐渡の風

狩野 泰一

山には神宿り 自然の恵みにあふれ 歴史を今に活かす 風強き庄内

「ヒヤーーヒャオーーー」響き渡る篠笛の音色。２０１４年７月、羽黒山五重塔にて演奏させていただいた時の写真がみつかりました。

千四百年の歴史を持ち、人々の広く篤い信仰に支えられる出羽三山。その一つ羽黒山に建つ国宝五重塔は、六百年前に再建されたもの。近くには樹齢千年、樹の周囲10メートルの巨杉〝爺杉〟もあります。夜の帳が下りる頃、そのただならぬ霊気を感じながら笛を吹いたことを、今も身体が記憶しています。

思い起こせば、庄内と私のご縁は、ご当地出身の箏奏者、高橋理香様からいただいたものばかり。クレードル編集長の小林好雄様にも、ずっと応援していただいております。調べていただいたら、庄内では23年間に14公演と6回の篠笛講習会とのこと！ あらためて御礼申し上げます。

庄内での初公演は２００１年９月、三川町「アトク先生の館」。篠笛、太鼓、唄等の独演会でした。皇室関係の建築も手がけた宮島佐一郎氏設計の立派なお屋敷と、江戸時代元禄期に一千両の巨費を投じて築造した名園を、見事に管理維持し利用されています。庄内は古き良きものを大切にする土地柄なのでしょう。

２０１２年の９月には、映画『種まく旅人〜みのりの茶〜』の音楽を一緒に作った宮本貴奈さんと、上映記念・サントラCD発売記念として、「鶴岡まちなかキネマ」でコンサート。こちらは、昭和初期に建築された木造の絹織物工場をリノベーションした映画館。この地の歴史を今に活かしたい、という想いが伝わります。

２０１５年1月には酒田市美術館でミュージアムコンサート。素敵な会場で、絵画と篠笛と箏のコラボでした。道中の高速道路には雪が積もり、ものすごい風で路面は凍結。中央分離帯には突っ込んだ車が！ 私が住む佐渡以上の、庄内の暴風雪の洗礼を受けた冬でした。

その他、三川町公民館、庄内町「響ホール」、鶴岡市「黒川能の里王祇会館」、酒田市「希望ホール」等でたくさんの公演、篠笛講習会をさせていただきました。感謝！ 祭りを守る青年たちと作ったYouTube動画「２０１７講習映像笛『上達の秘訣』」は、視聴回数10万回を超えています。

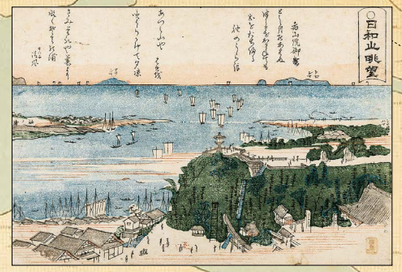
そして今年の11月12日は「王祇会館」にて「和洋融合の響きコンサート」（詳細は本誌38ページ）。「佐渡の風」を庄内に届けたいと思います。いも煮、麦切り、お酒、ワイン……佐渡に負けず、庄内は自然の恵みにあふれていますね。温泉も最高！ うーん、待ちきれません！

かのう・やすかず／１９６３年東京都生まれ。篠笛奏者。87年鼓童のメンバーとなり97年に独立。佐渡島に暮らしながら日本古来の「篠笛」の新たな音世界を広げ、２００５年ヤマハからメジャーデビュー。多くのCD、楽譜集を出版している。世界30カ国で2千回を超える公演を行い、「篠笛KANOメソッド」で日本、世界各地に篠笛を広め、YouTubeチャンネルも展開。２０１５年ミラノ万博、東京ドームでの日米野球アトラクション出演他、南こうせつ、サリナ・ジョーンズ、中西圭三、河村隆一など多くのアーティストと共演している。
https://www.yasukazu.com

山形デスティネーションキャンペーン特別企画「篠笛と箏の響き 〜国宝羽黒山五重塔にて〜」（2014年7月21日）
写真＝板垣雅哉

約350年前に開かれた西廻り航路が賑わいをもたらした酒田には、
今も湊町文化が息づいています。
海へとひらかれたこの街の人々が持つ進取の気風が
時代の層となって今があり、その中にかつての原風景を想う場所もあって
江戸へ明治へ、大正、昭和へと、時代を訪ねて街に出れば
忘れかけていたドキドキもワクワクも思い出すような出会いが待っています。
2023年の夏の日、私たちの街、酒田を歩きました。

〈参考資料〉
伊藤珍太郎『酒田の名工名匠』(酒田の名工名匠刊行会1977)
「新編 庄内人名辞典」(庄内人名辞典刊行会1986)
『酒田市史 改訂版・上巻』(酒田市1987)
月刊「SPOON」小路への招待 思い出コレクション(1996)
「海晏寺 開創六百年奉賛報恩記念 宝塔」(記念事業事務局2001)
『ジュニア版 酒田の歴史 再訂』(酒田市教育委員会2002)
月刊「SPOON」庄内庭園探訪(2003〜)
「庄内探訪」(庄内開発協議会2017)
「湊町さかた探検隊」活動資料(2011〜)



酒田市街全図

特集 湊酒田まち歩き

「酒田市街全図」(大正時代)酒田市立資料館蔵
「酒田十景」(谷地田稲荷、妙法寺鐘、山王櫻、日和山眺望)(江戸時代)公益財団法人 本間美術館所蔵

湊町、名建築の町をあるく

特集◎湊酒田まち歩き

明治28年築。現存する木造六角灯台としては日本最古級。

佐藤泰太郎の代表作③
木造六角灯台

明治28年築。酒田の歴史に関する展示や傘福、辻村寿三郎氏の作品展示も。

佐藤泰太郎の代表作②
山王くらぶ

江戸時代の料亭「相馬屋」を改装し、平成12年に開楼。酒田舞娘の踊りと食事を楽しめる観光施設。

佐藤泰太郎の代表作①
舞娘茶屋 相馬楼

港町、船場町、山王森に新町…。日和山界隈には、湊町酒田の往時の繁栄を思わせる小路や建物が現存しています。そんな酒田のワクワク・ドキドキに出合える街を歩いてみました。

案内をお願いしたのは、元山形県港湾事務所職員で山形県景観地域づくりアドバイザーの熊坂俊秀さんです。城下町やまがた探険隊の副隊長で、湊町さかた探検隊の元メンバー。平成27年から始まった「ぶら探酒田」発足時から参加しているまち歩きのプロフェッショナルです。「私はよく、参加される方に、『幸せの中身って何?』なんて質問をするんです。答えは、テクテク・パクパク・ゲラゲラ。加えてワクワク・ドキドキで、まち歩きはそのワクワク・ドキドキを発見するツールです。さらに他の人たちと一緒に歩けばその感覚を共有できますからね。歩いて発見して、自分の街を好きになってほしいです。」

ナビゲーター
熊坂俊秀さん

最上屋旅館／テレビドラマ化もされた『日本ボロ宿紀行2』(上明戸聡著・鉄人文庫)で、当館の一部屋が本の表紙を飾っている。

今回のコースの1つは、湊町の面影が残る日和山界隈。出発地は中心地、中町の「最上屋旅館」です。

【最上屋旅館と中島精肉店】

大正15年築の歴史ある旅館は、玄関に足を踏み入れると一気に大正、昭和の気分に。「真室川町出身で、酒田で材木商をしていた当主の曽祖父が建てたもので、天井に屋久杉など驚くほど良質な木材が使われています。こうした建物が酒田にあり、今も現役というのは素晴らしいことです。」

最上屋旅館を後にして、名店「久村の酒場」の前を通り、「中島精肉店」へ。ここは、特撮映画『ゴジラ』の初代スーツアクターを務め、〝ゴジラ俳優〟と呼ばれた故・中島春雄氏のご実家です。創業100年以上の

湊町さかた探検隊員
佐藤信子さん

小路と酒田大佛／相馬楼と料亭香梅咲の間にある姿見小路。この先の観音小路から酒田大佛が見える。さらに進むと弁天小路と交差する。

小路へ。ここで視線を上に向けてみると、持地院の「酒田大佛」が木々に囲まれてその美しい姿を見せてくれました。「酒田大佛は戦中の金属類回収令で一時姿を消しましたが、近年、有縁無縁の方々の寄付などによって再建されました。私はここから見る姿が酒田大佛の良さを表しているようで好きなんです。」

【料亭香梅咲】

小路を戻って香梅咲へ。玄関から見える太鼓橋の風情と「香梅咲」と命名した千家尊福揮毫の書が、酒田

香梅咲／安政元(1854)年創業の老舗料亭。正面の門は創業当時のもの。旧名「芳香亭」。

山王くらぶ／夢三の間

酒田の名棟梁・佐藤泰太郎(1861-1938)。従兄弟は世界的数学者・小倉金之助。若い頃から腕前が高く評価され、数々の著名な建築物を残した。明治の神仏分離の時に羽黒山の仏像を集め、保護。現在は佐藤コレクションとして出羽三山神社に展示されている。

【舞娘茶屋 相馬楼】

ここからは台町。石畳が美しい舞娘坂で目を引く「相馬楼」は、かつての料亭です。「今の建物は、明治27年の庄内大震災で類焼を免れた土蔵を取り囲んで建てたもので、棟梁は酒田の名工、佐藤泰太郎です。火災の多い酒田に現存する歴史的建造物の多くが、泰太郎によるもの。同じ時代、鶴岡では高橋兼吉が棟梁として活躍していたので、時代の活気を感じますね」と熊坂さん。

【姿見小路と酒田大佛】

相馬楼と「料亭香梅咲」の間のひっそりとした小路は「姿見小路」と呼ばれてきました。芸者さんが手鏡で姿を見た、など諸説あります。小路を奥へ歩くと観音堂のある観音

―日和山エリア―

湊町、名建築の町をあるく

特集◎湊酒田まち歩き

山王山から細い坂道を下って新町（朝顔小路）へ。住宅街と工場の奥に海が広がる酒田らしい景色が望める。

家坂亭で作られている飾り菓子

の料亭文化の歴史と品格を物語ります。昭和51年の酒田大火では火元が近かったものの、風向きで被災を免れました。「相馬楼、小路、香梅咲が並ぶ魅力的な場所」と熊坂さん。

【港座～山王くらぶ】

舞娘坂を上り、右に折れて「港座」へ。もとは明治期に旧上台町に建てられた芝居小屋で、その建築も佐藤泰太郎が手がけました。現在の日吉町の建物は昭和29年頃造。映画館の閉館後はライブハウスとして再建され、プロのミュージシャンも多く訪れる場所となっています。

次は、酒田で一、二の格式を誇った旧料亭「山王くらぶ」。「見どころは泰太郎の見事な建築意匠と、1階の『夢二の間』です。竹久夢二は3回も酒田に来たようですから、よほど居心地が良かったんでしょうね」。

【酒田湊旧廻船問屋家坂亭（いえさか）】

向かった船場町は、江戸後期から栄え、明治初めには問屋や船宿などが集積していたといわれています。家坂家は、油紙で仕立てた「桐油合羽（とうゆがっぱ）」を主力商品に、北前船舟運で財を築きました。その栄華を想わせる建物は、昨秋から気軽に立ち寄れるサロン「家坂亭」として公開されています。「往時は家坂亭のすぐ側まで海が来ていて、船着場に直結していたといわれています」。

【荒木米穀店】

家坂亭にほど近い「荒木米穀店」も、店の裏側に岸壁の船着場があり、直接搬入出して米蔵にお米を運んでいたそう。現在の店舗は大正末期に本家から分家した2階建ての町屋造り。6間半の間口の左側が通り土間になっているのが大きな特徴です。

【下日枝神社～新町～日和山】

最後は日和山へ。随神門を通って下日枝神社を参拝し、山王森の展望台から小路を抜けて新町へ。日和山公園に戻って木造六角灯台から酒田の港を眺めます。この灯台は古くは最上川左岸の宮野浦に「酒田灯台」として建てられ、のちに大浜に移築。灯台の近代化によって、昭和33年、現在の場所に移築保存されました。

「目の前にある街は、これまでこの地に生きてきた人たちが時間を重ねて多くの工夫や取り組みをしてきた結果の姿です。街を歩くとそのことを感じたり発見したりして、ここに住んでいて良かったと思える。まち歩きを通して、自分の今も肯定できるような、前向きになる人が増えるといいなと思います」。

街や港の景色は変わっても、日和山から眺める水平線と空はいつの時代も変わらず、この街に住む人たちと共にあります。

家坂亭／現建物は明治27年の庄内大震災後に建てられたもの。町屋造りが見学でき、飾り菓子の制作体験もできる。

荒木米穀店／天保3（1832）年、米商として創業。通り土間が奥まで続き、天井が高いのが特徴。

―日和山エリア―

今回歩いたコース

※各施設等の開館および営業時間はお問い合わせください

酒田舞娘がいるよ

大人気のメンチカツ

ゴジラ俳優の実家

お昼は予約なしでも食べられます

言わずと知れた名酒場

昔はこのあたりまで海だったとか

酒田湊の新名所フードコート

拿福の製作体験も（要予約）

ここからスタート

とても貴重な屋久杉材の天井

お昼はここで食べました！

月に1週間くらいはお店にいます

六た茶屋

酒田市出身の歌手・白崎映美さんが開いたかまど炊きの庄内米が食べられるお店。「文化の交流をしたい」と白崎さん。

酒田衆が愛でた十景をあるく

特集◎湊酒田まち歩き

このコースを歩く前に熊坂さんから出されたキーワードは「酒田十景」と「鳥海山」。酒田駅から寺町の方まで広がるこのエリアでは、かつての酒田衆たちが愛でたであろう街の景色を、庭園や寺社などを通して感じることができます。

酒田三大庭園②
清亀園（せいきえん）

庭園の銘碑には後年に所有した池田亀三郎の名が。現在は市が所有、茶や琴などの稽古に使われている。

酒田三大庭園①
寄暢亭（きちょうてい）

別邸から一望する座視鑑賞式、および庭内を巡る池泉回遊式を兼ね備えた意匠の庭園。

「棟梁の佐藤泰太郎とほぼ同じ時代に酒田で活躍した、もう一人の名匠がいます。庭師の山田挿遊（そうゆう）です」。挿遊はこのコースで向かう浜畑（現栄町周辺）の通称「興屋（こや）の山」に住み、最盛期には50数人もの門人を抱えていました。その作庭の最高傑作と名高いのが「寄暢亭」です。一般公開はしていませんが、所有者のご厚意でお訪ねすることができました。

【寄暢亭】

船場町の廻船問屋、小山家の別荘として明治23、4年頃に築造。庭園は起伏の大きい傾斜地を生かしたすり鉢状で、池泉（ちせん）を囲んで樹木が緑陰をつくり出しています。「つま先下がりの地形というのは、人が気持ちのいい景観なんです。そのことを昔の人は知っていたんでしょうね」。

寄暢亭をあとに、熊坂さんについて興屋の山のなだらかな坂道を上ると、最も高くに稲荷神社が。境内に山田挿遊翁の壽碑（じゅひ）が建立されていました。「碑を建てたのはお弟子さんたちです。それだけ人望を集めたということですよね」。たとえ貧しくても「興屋の山の人間は、飢えても盗まぬ」と弟子たちを導いた挿遊、その大きな石碑に人柄が重なります。

【西国三十三所 観世音菩薩】

稲荷神社の奥には、三十三観音像がそれぞれの札所の方角に向けて立ち並んでいます。船形の台座に乗った千手観音様も見え、北前船との関わりもありそうです。

北前船舟運の歴史を訪ねて町を歩いてみると、酒田には寺社が多いことに気がつきます。その多くは豪商らが造営寄進したとされ、〝寺町〟の街並みは火災の多かった酒田で「北の守り」ともいわれました。

「ここからもう一つのテーマ『酒田十景』を歩いてみます。江戸後期に町の景観を観光の土産ものにした、その感覚に酒田衆の文化度の高さを感じますね」。「酒田十景」は、文久年間、絵師の五十嵐雲嶺（うんれい）が描いた木版画で、四季の景勝地の鳥瞰図（ちょうかんず）です。十景のうち「妙法寺鐘」のある界隈、寺町へ歩を進めます。

【本長山 妙法寺】

応仁元年開山の法華宗のお寺。元禄11年に酒井家より3万坪を借り受け、酒井家の准菩提寺となり、裏紋「抱沢瀉（だきおもだか）」を寺紋としています。

妙法寺の切り通しの参道を進んで、中央東町へ。そこには、海晏寺と龍厳寺（りゅうごんじ）が酒田十景に描かれたままの場所にありました。

【河雲山 海晏寺】

禅語「海晏河清（海はおだやか河は清む）」に寺名を由来する応永元年創建の曹洞宗の名刹。ご本尊に釈迦牟尼仏を祀り、境内には本間家三代光丘が寄進した経堂と釈迦堂、仏塔としての三重塔など、七堂伽藍を備えています。社寺建築の伝統様式が美しい三重塔は、寺町の象徴として酒田の街を見守っています。

寺院が続く街並みから浜町通りへ。

妙法寺／「酒田十景」に描かれた妙法寺の「鐘」や「七曲山開運稲荷」は現存。境内には桜や蓮池、藤などの花木のほか、「子産せの松」の伝説も。

海晏寺／四方四佛尊像を奉安する三重塔は、三間三重、東北では初となる本瓦葺、材は青森ヒバ。深い軒の曲線が重厚感と優美さを描き出している。

福徳稲荷神社／酒田十景に描かれた「谷地田稲荷」。天保3年、旧谷地田村の開拓にあたって創建された。8月の例祭は昔の「夜会式」で、現在も夏祭りとしてにぎわう。

庭師、山田挿遊（1830-1896）。通称「興屋の山」で生まれ育ち、幼名は三太郎。寄暢亭、清亀園のほか、新井田川畔の加茂屋秋野家、八幡の大滝勘太郎家、遊佐町宮田の石垣茂左エ門家、明治天皇巡幸跡の屋上庭園なども手がけた。

—駅前エリア—

酒田衆が愛でた十景をあるく

特集◎湊酒田まち歩き

駅前の複合施設ミライニから眺める寺町、港まで。古来の寺町に沿うように新道が走り、緑が町の点景となっている。

途中、小さなお堂に立ち寄ります。

【十王堂】

堂内には、冥界の閻魔大王様を含む十王様と奪衣婆が鎮座しています。創建は寛永後期で、この場所にあって酒田大火の罹災を免れました。

酒田大火の復興を記念して設立された「酒田市立資料館」は、45年にわたって酒田の歴史文化を伝える知の拠点として市民内外の人々に親しまれてきました。令和6年の「文化資料館（仮称）」開館に向けて、現建物での歴史は一区切りに。

お寺めぐりの後は、浜町通りを過ぎて浜田小学校の近くまで歩きます。生涯学習の場として開放されている「清亀園」でひと休みです。

【清亀園】

明治24年に、大地主、伊藤四郎右衛門家の別邸として築造されました。庭園は山田捕遊の作です。当時は広い庭園の中に田んぼがあり、水を張った田に月を浮かべて観賞したとも。250本の庭木、心字池、石灯籠、全国各地の庭石、庭はかつて子どもたちの格好の遊び場でした。「捕遊は寄暢亭もこの清亀園の庭園も、鳥海山を借景にして造ったようです。今は木が育って見えませんが、酒田の街なかにもっと鳥海山が見えるところがあっていいと思うんですよね」と熊坂さん。

清亀園の「亀」と呼応する「鶴」、寄暢亭の緑陰に相対する「陽」の庭。このコースの締めくくりは、本間美術館の「鶴舞園」です。

【鶴舞園】

本間家四代光道が文化10年に別荘「清遠閣」と共に築造した庭園。その建造と造園は、北前船の往来が途絶える冬場の丁持らの失業対策でもありました。庄内藩主十代酒井忠器公が名付けたというその名園は、中島のある池を囲むすり鉢状で、その園路のどこからでもそれぞれの景色を見せてくれます。清遠閣の主座敷からは、庭の蓬莱島の背景に鳥海山を見渡せたといいます。「昔は街の中に鳥海山が見えるところが多くあって、人はその眺める場所に庭を造ったり、家を建てたり、寺を設けたりしていたと考えられます。鳥海山の大きさは酒田から見て角度にして10度から20度の間にあります。これは良い眺めだと感じる大きさなんです。この景色は酒田にいるから眺められる、そのことを地元の人に知っていてもらえたらと思います。その良さを発見するのもまち歩きの面白さの一つ。笑顔の人を見ると笑顔になるように、地元の人が自分の街を愛で、楽しんでいたら、外から見た人にも酒田はきっといい街なんだと伝わるはずです」。

酒田市立資料館／昭和53年開館。この9月30日で閉館し、令和6年に市総合文化センター内に新たに開設される。最後の企画展を開催中（～9/30）。

八雲神社／町の植林事業や開発に携わってきた由緒を持つ。ご祭神に素戔嗚尊を祀り、ウリ科の実をお供えすることから“キウリ天王さん”の愛称も。

※各施設等の開館および営業時間はお問い合わせください

興屋の山

下内町の大庄屋の伊東家が、天明の大飢饉で困窮した難民ら人々の救済のためこの丘に家を建てて住まわせ、造園などの仕事を与えたという集落。

—駅前エリア—
今回歩いたコース

南千日のお不動さん
林昌寺
福王寺
南千日町
各札所の砂が埋まってる説
西国三十三所観世音菩薩
稲荷神社
山田捕遊翁壽碑
ここからスタート
寄暢亭
清遠閣
鶴舞園
ゴール
本間美術館
本間家の別荘で、明治時代は迎賓館に
御成町
大正12年竣工の棚干跡
総合文化センター
中央西町
八雲神社
日和橋跡
中央東町
相生町
泉流寺
東根菓子舗
妙法寺
外ノ町
鷹町稲荷神社
鷹町
筑後町
あけび
夕映え
いが栗きんとん
秋明菊
秋日和
明治9年創業
四季の移ろいを映す
上生菓子
浄福寺
浄徳寺
龍厳寺
切り通し
海晏寺
正徳寺
済町
さかたセントラルホテル
笑っているようなお顔の閻魔様
寺町
十王堂
二番町
本間家三代光丘が寄進した経堂と釈迦堂
近江町
浜田
上日枝神社
清亀園
江戸時代のさかたみやげ
酒田十景
「木版 酒田十景」は「本町通景」「山王櫻」「海向寺月」「雀田口雪」「日和山眺望」「妙法寺鐘」「新井田橋」「高埜濱舶」「谷地田稲荷」「山王社雨」の10名所が描かれ、それぞれに松尾芭蕉や常世田長翠らの句などが添えられている。版木は本間美術館所蔵。
酒田市立資料館
一番町
大正3年に鉄道が開通!
酒田駅
福徳稲荷神社
谷地田の稲荷さん
酒田駅
幸町
ミライニ

庄内町跡の青きな粉

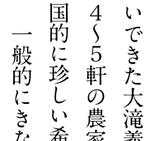
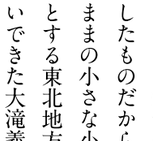
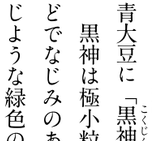
大豆をいって砕いた粉は「黄な粉」を語源とするように黄色いのが一般的でも庄内では薄緑色の青きな粉が当たり前なのだ

庄内平野を横断する最上川の南流域に「跡（あと）」という集落がある。この地ではかつて雨が降ると最上川が頻繁に流路を変えていたため稲作が難しく、麦やからし種などの畑作を行ってきた。「跡の青きな粉」はその中で生まれた伝統食材である。

跡で青きな粉の原料となる青大豆の栽培が始まったのは江戸時代。戦後は女性が大鍋でいってきな粉にして箱詰めして庄内各地に売り歩いたという。しかし時代の変遷とともに生産者が減少。平成に入るとJAあまるめが生産者と連携し、「跡の青きな粉」として特産化を進めるようになった。青大豆に「黒神（こくじん）」と名が付いたのもその頃だ。

黒神は極小粒の青大豆で、みそや豆腐、納豆などでなじみのある黄大豆とは別の品種である。同じような緑色の枝豆も、黄大豆を若いうちに収穫したものだから当然異なり、黒神は熟しても青いままの小さな小さな豆だ。産地は山形県をはじめとする東北地方で、跡では現在、代々畑を受け継いできた大滝義和さんと梅木隆さんを主軸に、他4〜5軒の農家のみで栽培している。これが「全国的に珍しい希少な豆」と言われるゆえんだ。

一般的にきな粉は栄養豊富な大豆を丸ごと粉末にしているため、体内への栄養吸収率が高く、毎日大さじ1杯の摂取がいいと言われる食品である。跡の青きな粉は加えて大豆オリゴ糖の含有量が多いため、甘みが強く、風味豊かという特長を持つ。それなら青きな粉の色が引き立つように、お餅や牛乳などの白いものに合わせてキレイな色を愛でながら、庄内平野の光と風に育まれた大豆の甘みと風味を味わうのがベストかも。

現在、購入できる「跡の青きな粉」は全部で3種類（製造者：大滝義和さん、梅木隆さん、JAあまるめ）。庄内町新産業創造館クラッセやJA鶴岡の産直などで販売している。青きな粉は、紫外線を受けると黄色く変色するため、暗所での保管が必須。

JAあまるめ農産加工部 0234-42-2770
大滝義和（生産者） 0234-43-2161

（取材・文　長谷川結）

星流る月山の頂に立つ

パノラマに広がる銀漢の中心に立ち
今にも届きそうな星に手を伸ばす。
目線を下ろす先につながる街灯りは
星のように優しくきらめいていた。

月山神社と庄内平野の夜景

季語
星流る（ほしながる）
流星（りゅうせい）
流れ星。八月頃が最も多く見られるという。

月山をたちまちに呑み夏の霧

―粕谷容子

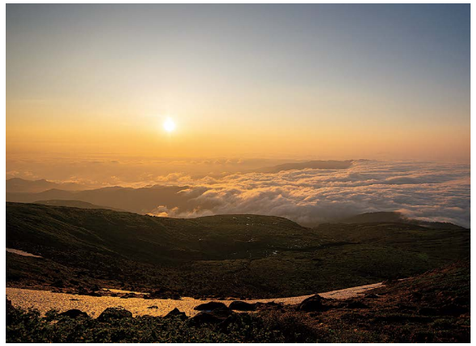
弥陀ヶ原では、咲き始めた日光黄菅がさわやかな緑の草地で橙黄色を添えていた。御田原神社でこれから向かう山頂に向かい手を合わせる。月山の頂には山名の起こりといわれる月読命が祀られた月山神社がある。今年は卯歳御縁年である。

麓から見る景色と山の天気は違う。雲の動きはどんどん変わる。晴れ間に飛んでいた蜻蛉が一斉に見えなくなると、また雨が降り出し雲中に入る。それでも朱鷺草、岩銀杏、兎菊、薊など、次々出会う花に心が躍る。

だんだんとこゑ近くなる大雪渓

―石井野洲子

9合目の佛生池近くに広がる雪渓から冷気が上る。月山は日本海沿岸からわずか40㎞ほどにあるため、冬季は大陸からの季節風をまともに受け豪雪地帯となる。1年の約半分を雪に埋もれて過ごすのはいかにも過酷のようだが、実はその逆で、氷点下になる外気温から雪に保護されているという。雪渓の傍では猩猩袴、岩鏡、白根葵、稚児車が咲いていた。一段と強くなる雨の中、頂上へと急ぐ。モックラ坂を過ぎる頃、雨は上がり、木道の脇で深山竜胆や深山薄雪草が出迎えてくれた。


雲海からのご来光

流星の生るる先と消ゆる先

―あべ小萩

雨上がりの谷を上がってくる風はまだ冷たく、空は青と橙のグラデーションを映す。ダイヤモンドの光を放って雲海に沈む夕日に、ふと亡き父を想った。

夜中、頭上の澄んだ空に無数の星がパノラマで広がり、流れる銀漢は、きらめく一本の帯となる。庄内平野の夜景が瞬く星になり、空とつながっている。普段は麓から仰ぐ月山に、いつも見守られていることに気づいた。

雲海の上に月山開かるる

―太田権六

翌朝、雲海から登るご来光を仰ぎ、月山神社を参拝した。山間に流れ落ちる雲はまるで滝のようだった。会いたかった景色がそこにあった。

月山は、芭蕉が「おくのほそ道」紀行中に足跡を残した唯一の高山。古から変わらない景色に未来の幸せを願う。雪渓の脇で咲く雛桜に再会を約束して山を下りた。

雛桜

広がる雪田草原（雪渓）

朝露に光る稚児車

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）